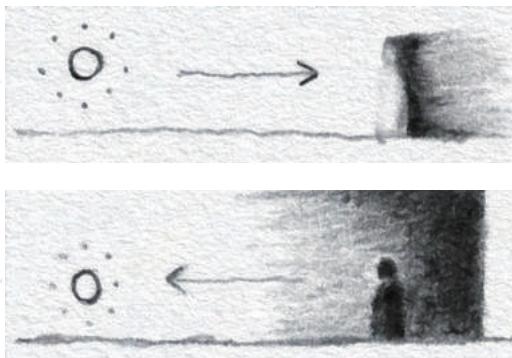


"Light" House

かつて灯台には「灯台守」がいた。
彼らは日々灯台に灯りを燈し、船舶と交信することで、航海を手助けしていた。また単なる道標の光にとどまらず、その灯火は船乗りと灯台守との無言の対話であった。
しかし現在、灯台に灯台守はいない。無人化された灯台は、無機質な光を機械的に發している。
船乗りが灯台の光をみて、灯台守を想うことともなくなった。

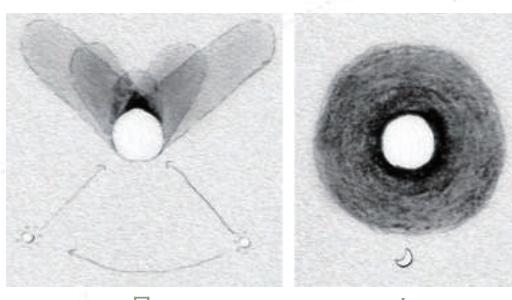
本提案では、有人灯台として機能する、全盲者のための住宅を提案する。

-1- 「光」に触れて触れられる

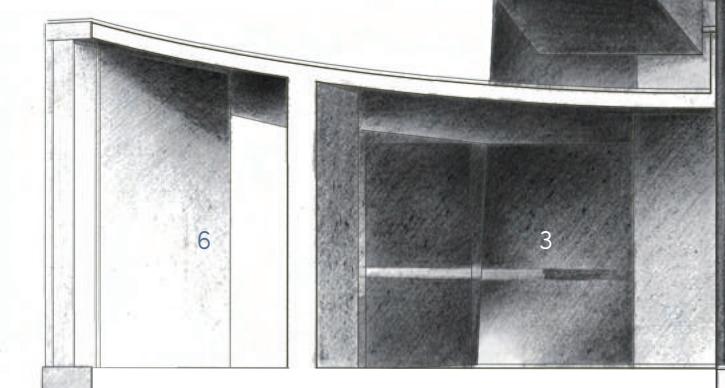


我々の日常は「光と触れ合う」ことで成立している。太陽の光を浴びることもあれば、時に光を求めて明るい場所へ向かう。そんな当たり前とも言える「光」との関係を「触れて触れられる」関係として解釈した住宅を提案する。

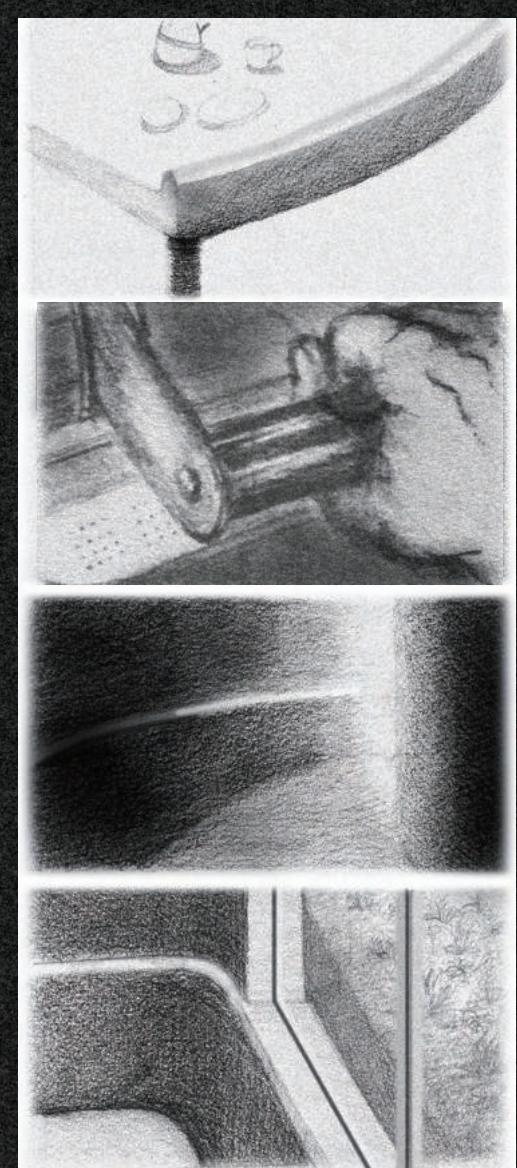
-2- 「LightHouse」と2つの光



灯台が暮らす家『LightHouse』を提案する。この家は昼は太陽光、夜は灯台光という異なる2つの光で照らされる。太陽光は季節や時間によって位置や光度を変え、その影もまた変化する。一方、灯台のそれは不变であり、灯台の足元には常に影が落ちる。『LightHouse』は、これら2つの光をもとに構成される。



-敷地-
港湾都市の近郊に立つ灯台



-5- “ある灯台守の一H”

東を向いたベッドの上で寝ながら覚めた。水平線から昇る太陽の光が目覚めの合図だ。今日は12月22日。一年で最も日照時間が少ない一日が始まる。私はベッドから下りると、右へ向かってぴったり7歩あるき、洗面台で顔を洗い、いつもの通り鏡を見ずに慣れた手つきで髪を剃った。湯を沸かしてコーヒーを入れるあいだ、冬の朝のキリッとした陽の光を左の頬に感じる。コーヒーを飲み干すと、日課である洗濯、掃除、軽い運動を手際よくこなしていく。部屋から部屋へと移動する際には、柔らかなカーブのついたテーブルをつたう。寒い冬の朝だからこそ、木の質感が温かく感じられる。その後昼食をとり、再びテーブルを伝ってサンルームへと移動する。午前中はまだ暗かったが、太陽が南中を過ぎると柔らかな光が差し込むようになる。少し昼寝をし、古いジャズのレコードをかけ、昨日読みかけのまま伏せておいた小説の続きを読んだ。そうこうしていると、顔の正面に受けている太陽の光が、頬を伝い右に動いたのを感じる。それは“仕事”的合図であり、毎日のことではあるが徐々に緊張感が高まっていく。壁伝いに6歩半、ドアを開けて点灯室に入る。

右手を壁に這わせると、冷んやりとした鉄製の大きなレバーに触れる。大きな深呼吸をひとつしてから、重いレバーを勢いよく上げる——大きな音とともに束の間の静寂が訪れ、一筋の強い光が海に向かって放たれた。私は直接見ることはできないが、そのことが確かな感触として手に残る。再び大きく息を吐き、今度は左を向いて点灯室を後にする。廊下の先に落ちる光を頬に、緩やかなスロープを下る。突き当たりで緩やかに曲がる壁の感触と、部屋に入ってくる微かな土の匂いを頬に、外の空気を吸いに庭へでる。冷んやりとした潮風、湿気をふくんだ海の香り、遠くで鳴る汽笛の音を全身で感じ、海を行き交う船舶とその船乗りたちを想う。一日のうちでも大切な時間のひとつだ。

しばらく物思いに耽け、ゆっくりと部屋へ戻る。いつもより少し早い夕食をつくって食べ、長めのお風呂に浸かり、

あがつから暖炉に火を入れた。徐々に高まる熱は肌を、バチバチと鳴る音は耳を心地よく刺激し、それに混ざって波が岩礁にぶつかる音も聞こえる(船乗りたちは安全に航海しているだろうか)。そんな感触を

しばらく楽しんでいると、次第に空気が冷え、音も小さくなり、一日が終わりに近づくを感じる。火を消して壁伝いに廊下へと向かい、夕方とは反対に今度は緩やかに昇る感触を

足の裏に感じながら歩を進める。廊下を昇りきると暗闇が一段と深くなつたのがわかる。ここは家の最も暗い場所で、そこを左に折れると寝室にたどり

着く。光と影に導かれるようにして、あるいは触覚、聴覚、嗅覚

で直に家と触れ合うことによって、今日もまた平穏で刺激

的な一日を過ごすことができた。明日からは日照

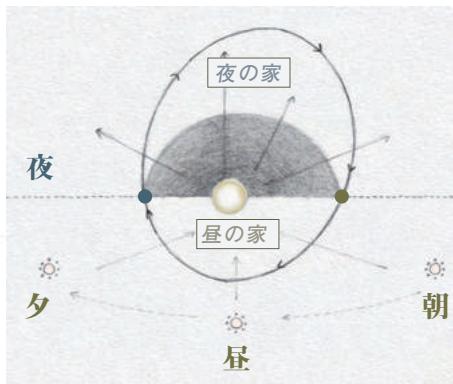
時間が徐々に長くなることだろう。そんな

ことをぼんやりと考えながら、東を

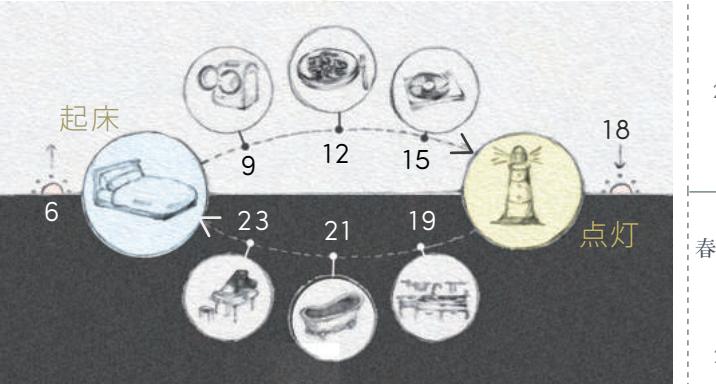
向いたベッドのうえで

眠りについた。

-3- 楕円平面と昼夜の家



-4- 灯台守に触れる / 触れられる建築



太陽 / 灯台の光の方向性を考慮し、建築構成は灯台を焦点とした楕円平面とする。日中に太陽光を得る「昼の家」と夜に灯台光を得る「夜の家」の二つの家によって構成される。盲目的灯台守はこの二つの入れ替わり続ける光を辿り、二つの家を行き来することで生活を行う。

North PLAN
-NIGHT-

South PLAN
-AM10:00-

